

L18c 2000年しし座流星群流星痕同時観測キャンペーン(案内版)

戸田雅之(日本流星研究会)、山本真行(東北大・理)

流星痕の出現頻度は流星本体の光度と対地速度に大きく依存するため、明るい流星が多く流星群のなかで対地速度が最も速い(約70km/s)しし座流星群は流星痕観測に最も最適です。しし座流星群の活動のピークは1998,1999年とされていますが、2000,2001年も1999年と同等かそれ以上の出現が予想されています(McNaught and Asher 1999)。流星痕の中で継続時間が10秒以上と長い永続痕が私達の観測/研究対象です。しし座流星群の活動が活発化した最近2年間で私達の同時観測キャンペーンでは1晩に2~3個の永続痕が得られています。今後2~3年は流星痕研究にとって短期間に多くの永続痕をキャッチできる機会であり、この時期を逃せばしし座流星群の次の活動期である33年後、2032年まで待たなければなりません。

今年2000年は月明かりの下での観測です。写真撮影では月明かりの影響を受けやすいが、レンズ、フィルム、露出時間をうまく選ぶことで月明かりの影響を大きく低減した流星痕画像を得る事が可能です。具体的には、(1)焦点距離の長めのレンズ(70mm以上)、(2)高感度のカラーフィルム、(3)短時間露出(5秒以下)があげられます。今年の流星痕同時観測キャンペーンの観測協定日は2000年11月17日~11月19日の毎夜0h~5h JSTに実施予定です。ポスターセッションでは流星痕同時観測キャンペーン発足以来の成果、2000年キャンペーンの呼び掛けを行います。